



次に諸大夫の間にある「虎図」です。諸大夫の間は、参内した人々の控えの間にあてられる建物で、東西に三室並んでいます。その中で最も格の高い「虎の間」には、麻地に墨で画かれた「虎図」があります。作者は江戸時代後期の岸岱^{がんだい}という画家で、岸駒^{がんく}の長男にあたり、岸派の2代目となる人物です。

岸派の祖となる岸駒は江戸時代中期から後期にかけて活躍をした画家です。「岸駒の虎」と言われるほど迫力のある虎の絵を得意としていました。

虎の間は東面を除く3方向に計12面の襖があり、そこには水を飲もうとしている虎や、力強く走っている虎、じゃれ合っている虎など全部で7頭の虎が画かれています。



※南面は参観場所から裏側にあたるため、御覧いただくことができません。

岸岱は他にも、御学問所中段の間「蘭亭図」や、皇后宮常御殿御寝の間「花鳥」、「近江八景」、「和曲水」、「関駒迎」を画いています。